

# しいむじな

2023・春

80

特集

## 人を利用する鳥たち

～農機が生み出す鳥の餌場～



トラクターの後ろを追うサギ、カラス、セキレイ(市原市 2023年2月8日)

### 房総の山のフィールド・ミュージアムとは

房総の山を舞台に、地域の自然や文化そのものを「資料」や「展示物」ととらえる、千葉県立中央博物館によるフィールド事業（野外で展開する博物館活動）の一環です。観察会を開催したり、君津市立清和小学校の校舎を利用した「教室博物館」を拠点に、地域の方々のご協力のもと、資料の収集や調査・研究等の活動を行っています。

漁師は「鳥山」と呼ばれるカモメなどの群れを目印に、魚群を探します。かつて瀬戸内海では、現地で「あび鳥」と呼ばれる潜水性のシロエリオオハムを頼りに「アビ漁」という伝統漁法が行われていました。あび鳥が海面からイカナゴの群れを襲うとき、海底からはタイやスズキなどが集まり、漁師がこれを釣るのです。このように、人は昔から、魚を獲る時に鳥を利用してきました。一方、鳥のほうも利用されるばかりではありません。今回の特集では、人を利用して餌を捕る鳥たちの姿をご紹介します。

(平田和彦)



特集

# 人を利用する鳥たち ～農機が生み出す鳥の餌場～

## 農機に集まるサギ類

稲刈りの季節、市原市の田んぼではコンバインが忙しく動いています。コンバインが田んぼにやってくると、間もなく15羽ほどのダイサギとチュウサギが集まってきました(写真①)。サギたちがコンバインのそばを夢中で駆けまわり、矢継ぎ早に嘴を繰り出して餌をついばむ様子から、興奮の程が伝わってきます。カエルや昆虫は、隠れ家だった稲がすつかり刈り取られ、コンバインに追いつてられた挙句、次々とサギに捕らえられていきます(写真②～⑤)。捕まったカエルは体をくねらせたがり膨らませたりして抵抗しますが、時すでに遅し。悉く丸飲みにされていきました。

その日は見られませんでした。が、しばしばアマサギも群れに混ざります。アマサギは英語で Cattle egret とい、「畜牛・白鷺」を意味します。この英名はアマサギの、牛や馬についてまわり、家畜のにおいに集まったハエや、家畜に驚いて飛び出したバツタなどを食べる習性由来します(写真⑥)。日本では農家の相棒が牛馬から農機に置き換わって久しいですが、農機にもついてまわるのが今どきのサギの暮らしぶりです。

## 乗り物をめぐる鳥たちの駆け引き

季節は移ろい立春を迎えた頃、田んぼでは耕耘が始まりました。

この時に活躍する農機、トラクターにも様々な鳥が集まります。その日はアオサギやダイサギといったサギ類の姿もありましたが数は少なく、代わりにハシボソガラスやハクセキレイが目立ちました。トラクターを追う群れを観察すると、種によって明らかにポジションが異なることに気付きました。トラクターのすぐ後ろにアオサギが、それにハシボソガラスが続き、最後尾にハクセキレイという順序です(表紙写真)。

土の中から掘り出された餌を真つ先に選んで狙える点では、トラクターの直後が一等地に思えますが、セキレイにとつては後方のほうが居心地が良い可能性が考えられます。自分より大きいサギやカラスとの干渉を避け、体力や神経や時間の消耗を防げるからです。また、すでにサギやカラスが食べ終えた所でも、セキレイが利用するには十分なサイズや量の餌が残っているのかもしれない。

乗り物のまわりで餌を食べる鳥については、古くから興味深い研究が行われています。カモメ類には様々な大きさの種類がありますが、小型種は大

餌略奪を受けます。ところが、ごみ処理場で餌となる生ごみをあさる時、不規則に動き回るブルドーザーやトラクターがいれば、そのまわりには機敏に動ける小型種だけが近づけることができ、餌を食べやすくなるという報告があります。

これに対し、トラクターやコンバインのそばに大型のサギやカラスが陣取れたのは、ブルドーザーやトラクターに比べてゆつくりと規則的に動くためでしょう。人を利用して餌を捕る鳥たちの間には、人や乗り物の動きに応じた駆け引きがあるようです。(平田和彦)

## 参考文献

Bellebaun J. (2005) Between the Herring Gull *Larus argentatus* and the bulldozer: Black-headed Gull *Larus ridibundus* feeding sites on a refuse dump. *Ornis Fennica* 82: 166-171.  
Burger J. (1981) Feeding competition between Laughing Gulls and Herring Gulls at a sanitary landfill. *Condor* 83: 328-335.



写真① 農機のまわりで餌を狙うサギの群れ (市原市 2022年9月28日)  
 写真② ニホンアカガエルを捕食したダイサギ (市原市 2022年9月28日)  
 写真③ ニホンアマガエルを捕食したダイサギ (市原市 2022年9月28日)  
 写真④ クビキリギスを捕食したチュウサギ (市原市 2022年9月28日)  
 写真⑤ クビキリギスを捕食したダイサギ (市原市 2022年9月28日)  
 写真⑥ アマサギと畜牛 (沖縄県八重山郡竹富町黒島 2022年4月19日)

## コラム

## 房総丘陵の動植物(28)

## 斜面の草の下に住む虫たち

房総丘陵の林道を歩いていると、垂直に近い急な斜面沿いにミヤマカンスゲなどの大型のスゲ類や、イノデ類などのシダ植物がたくさん生育している光景に出くわすことがあります(写真①)。こうした環境は房総丘陵のあちこちで目にしますが、特に沢沿いなどの湿った場所で良く見られます。

こうした斜面沿いのスゲ類やシダ植物の群落は、さまざまな昆虫の生息場所となっています。スゲ類を寄主とする昆虫にはクロスジヒゲナガカメムシ、ジャノメチョウなどが、シダ植物を寄主とする昆虫にはクビワシダカスミカメ、ケナガチビクロノメイガ、イカリモンガなどが知られます。

また、スゲやシダの群落の根際を観察すると、枯れ葉などがまとまって溜まっていることがあり、溜まっている場所が夜行性の昆虫や冬越しをする昆虫(写真②)にとって、隠れ家として好適な環境となっているだけではない

く、森林の土壌中に生息するはずのハネカクシ類(写真③)などがまとまって見つかることもあります。なぜ、このような場所で土壌性の昆虫が見られるのでしょうか。

急な斜面に生育し、何枚もの長い葉を放射状に広げたスゲやシダは、まるで逆さに置いた傘のように、上から降ってくる落ち葉や果実を受け止めやすく、その根際には多くの枯れ葉、落果実、種子などが溜まります。そのため、適度な湿度と有機物が保たれるだけでなく、土壌生物の餌となる有機物も多く存在するようになっています。こうして、スゲやシダの根際は、土壌性昆虫にとって重要な生息環境であるリター層\*1に似た条件になると考えられます。

## 調べてわかった新発見

この変わった環境にはどんな種の昆虫がいるのでしょうか。私の専門であるカメムシについて調査を進めてみると、さまざまなことがわかってきました。

例えば、ウスイロカモドキサシガメという他の節足動物を餌とする肉食のカメムシ(写真④)は、照葉樹上で生活するものの個体数はあまり多くなく、本州より西に「薄く広く」分布するとされてきました。しかし、林内の斜面に生えるミヤマカンスゲの枯れた部分をめぐるように捕虫網を動かすと、あちこちでこのカメムシが採集されることが分かってきました。中には狭い範囲から10個体ほどが見つかることもあり、どうやらミヤマカンスゲの根際が重要な生息場所であるようです。こうした環境からは、他にも珍しいカメムシが見つかり、中には千葉県初記録種や未記載種\*2が見つかることもあります。カメムシ

以外にも視点を広げると、おそらくもっとたくさんの発見があるでしょう。

斜面に広がるスゲやシダの群落は、一見すると「何の変哲もない」場所に見えますが、多くの新発見が眠っている環境でもあります。皆さんも山道でこのような場所を見つけたら、そこには名前がついていない昆虫や生態が分かっていない生き物がいるかもしれない、ということに思いを馳せてみてください。

(伴 光哲)

\*1. リター層…森林において地表面に落ちたまま、土壌生物によってほとんど分解されていない葉や枝などが堆積した層のこと。

\*2. 未記載種…学術論文などで正式に分類学的記載が行われておらず、未だ名前が与えられていない生物種のこと。こうした未記載種を研究者が論文などで記載し、発表されることで「新種」として公表される。



- 写真① 斜面沿いに生育するスゲ類とシダ類 (東京大学千葉演習林)  
 写真② スゲの根際で越冬していたオオツノカメムシ (東京大学千葉演習林)  
 写真③ スゲの根際の枯れ葉だまりから採集されたハネカクシ類 (大多喜町)  
 写真④ ウスイロカモドキサシガメ (東京大学千葉演習林)



## 教室博物館移転のお知らせ

教室博物館は、房総の山に関する調査研究、資料収集、県民の方々との交流の拠点として、平成15年4月に君津市立三島小学校の余裕教室をお借りして開館しました。令和2年の三島小学校の統合・移転後も引き続き旧三島小学校で開館を続けておりましたが、令和5年4月からは清和小学校で「清和小教室博物館」として生まれ変わることになりました。場所は、清和小の正門を入りすぐ右手の平屋の建物です(写真①、②)。ここには地域の方々や子どもたちの協力により収集された生き物や化石などの標本が保管してあり、手に取って確かめることができます。今後も新しい教室博物館を拠点とし、ますます充実した活動を行っていきたいと考えています。教室博物館は、毎月第2、第4金曜日の11:00~16:30に開館します。皆様のご来館を心待ちにしております。

(文：千葉友樹、写真：尾崎煙雄)



写真① 清和小教室博物館のある建物  
写真② 清和小教室博物館の入口

連載

## 小櫃川流域の生きもの キマダラカメムシ ～南蛮渡来の外来種、温暖化で分布拡大～

「なんだ、これは!」とびっくりした。大晦日、椅子に上がって、居間のカレンダーをはがしたら、黒い虫が白壁に張り付いている。「ゴキブリの幼虫?いや、形が違う。クサギカメムシ?」。毎年、クサギカメムシが、庭のブツレアから発生し、夏~秋に成虫が網戸に張り付いていたので、そう思ったが、「そういえば、秋に洗濯物についた虫が、部屋の明りの周りを飛んだ後、行方不明になったっけ。カレンダーの裏で越冬していたか。飼猫も気が付かないはずだ」と感心しながら、捕虫網でとらえ、管ビンに入れた。その時、アルコールを含んだ様な少し嫌な臭いが漂った。虫をじっくりみるとクサギカメムシよりも大きいし、頭と胸の黄色い線がはっきりしている。「キマダラカメムシ!木更津市にも遂にやってきたか?」と驚いた。このカメムシは南蛮渡来の外来種で、1770年代に長崎の

出島で採集され、1783年に新種として記載された。国内の分布を広げつつあり、2008年には東京都から、2011年には愛知県から記録された。地球温暖化に後押しされ、分布域は今後も拡大してゆくと予想されていた。千葉県外来生物リスト2020年改訂版によれば、千葉県でも松戸市など県内各地で確認されている。現在、木更津市史自然資料編を編さん中だが、委員の方から、昨年10月に近くの建造物の外壁にいたと写真を見せていただいた。2匹いたとなると流域の皆さんの周りでもきっと見られると思うので、注意して見てはいかがでしょうか?



写真① キマダラカメムシ 体長20~23mm (木更津市 2022年1月4日)  
写真② クサギカメムシ 体長13~18mm (木更津市 2019年7月12日)

### 参考文献

- ・友国雅章監修. 1993. 「日本原色カメムシ図鑑」全国農村教育協会. p221, 348.
- ・石川忠・高井幹夫・安永智秀編. 2012. 「日本原色カメムシ図鑑第3巻」全国農村教育協会. p484.
- ・千葉県環境生活部自然保護課. 2020. 千葉県の外来生物リスト2020年改訂版

(文・写真 千葉県立中央博物館ボランティア 成田篤彦)

### MEMO キマダラカメムシ

サクラヤカキなどの植物に幼・成虫が寄生。冬季に成虫が越冬のため家屋にあつまってくる。千葉県の外来生物リスト2020年改訂版では、生態系または人に対する影響度は4段階のCランク(生態系に明らかな影響が認められる、あるいは予測される)、根絶の可能性を考慮した防除の緊急度は3段階のCランク(低い)とされる。

## しいむじなの由来



房総の山のフィールド・ミュージアムのニュースレターのタイトル「しいむじな」は、アナグマをさす房総丘陵の方言です。ムジナは地域によってアナグマやタヌキをさすなど様々なのですが、千葉県内ではアナグマのことが多いようです。房総丘陵の人々は、大きなスダジイの木のウロに棲んでいるムジナを、愛情を込めて「しいむじな」と呼んでいます。

田んぼや急な斜面の草の下も、鳥類や昆虫に利用されているのですね。このような普段は通り過ぎてしまいがちな場所でも調査が進めば、鳥類と人間との関係や昆虫の種多様性が明らかになるでしょう。

さて、本年度で慣れ親しんだ三島小学校の校舍を離れ、来年度からは清和小学校での教室博物館の活動が始まります。これまでの経験を活かしつつ、良いスタートが切れるように最善を尽くします。

(千葉友樹)

## 編集後記